を経験している分、こちらは離れているから遠い話だというのではなしに、われわれにも大きくかかわることとして受け止めています。とくに原子力の災害がありましたらから、それを専門にしている人には特別な思いがあります。エネルギー関係の人、建築関係の人、等々、分野は違っても、多くの人に共通するのは、日本としてここが勝負だという思いです。われわれも環境をキーワードにして、大震災から立ち上がる何かを見つけたいと強く思っています。

**高橋**　先日、東北大学の先生方とお会いしましたら、原発災害はとにかくここで食い止めて、今後は二度とおこらないシステムをつくらなければいけないという話をしていました。驚いたことに、東北大学の先生方は皆さんはとてもお元気でした。八月に東北大学で国際会議をすると話しておられたので、私が、震災後は国際会議の登録者が少なくなって困っていると嘆いたら、何をいっているんだとハッパをかけられました。震災に遭った人の方がモチベーションが高いように感じられました。

新たなリスクを知ったので、そのリスクを回避するイノベーションをしようという思いがあるのでしょう。日本は太平洋戦争ですっかりかんになり、二度と戦争はしないという価値観のもとでいまの日本ができてきました。それと似て、大震災を経験して初めてもてる価値観から次の日本ができてくるような気がします。

## 次元の異なる世界への飛躍

**山中**　われわれのセンターは、二段目のロケットが噴射しようとする瞬間にあります。ロケットを飛ばすのは人です。ここにいる私たちだけではありません。大阪大学の研究者、企業の方々、行政の方々、一般市民の方々、そういう人たちが集まって、ロケットを飛ばすことで、これまでとは全く次元の違う新しいことが成し遂げられます。私自身は材料屋ですが、このプロジェクトでは、自分の仕事に小さくこだわるようなことはなしに、勇気をもって大きな思いで参画していきたいと考えています。

環境というキーワードで先生方に集まっていただいています。今日のこの顔ぶれだけでも専門分野は多様です。そういう先生方同士で会話をして、一つ飛び越えたいという共通の気持ちを抱いているのは、とても大きなことではないかと思います。いままでの成果を大切にしつつ、これからやろうとしているのは違う世界へのチャレンジです。キーワードはメゾです。メゾは芽が出だしたところです。メゾの将来に期待してください。ぜひともそれにお応えしたいと思っています。



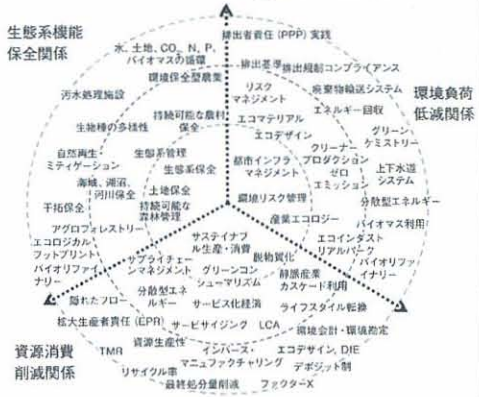
書籍紹介

## 『サステイナビリティ・サイエンスを拓く——環境イノベーションへ向けて』

**原圭史郎・梅田靖編著**
**大阪大学環境イノベーションデザインセンター監修**

大阪大学出版会
2011年5月刊
260頁
本体2300円+税

図1　循環型社会形成に向けた対策領域のマッピング.（本書213ページより）




『サステナ』をこれまで読んでこられた方々の率直な思いとして，たぶん次のようなことがあるのではないでしょうか．——サステイナビリティ学がスタートしてすでに5年が経ち，実際にそれが社会を変えていくありさまをみてみたい．

大阪大学はイノベーションをキーワードに掲げ，初めから実践的志向を強く打ち出してきました．大阪大学のこれまでの成果をまとめ、その上に立って「社会転換を具体的に促していくための研究」を切り開く方策を提案しているのが本書です．

第1部「サステイナビリティ・サイエンスの萌芽」，第2部「持続可能社会を導くシナリオ・評価・イノベーション」，第3部「制度設計とガバナンス」，第4部「持続可能な地域へ向けた実践と展望」，第5部「サステイナビリティ知識の構造化とシーズマップ」で構成され，その随所から，世界の先頭に立ってイノベーションを導いていこうとする大阪大学の意気込みが感じられます．

図1は循環型社会を形成するに向けてどのような対策領域があるかを整理したものです．これらのキーワードがばらばらなままでは循環型社会にはなかなか近づけません．全体を俯瞰してビジョンを描き，そのビジョンを達成するのに寄与する研究のシーズを集めて，具体的な問題解決に結びつけていかなければなりません．そのために「メゾ」領域の開拓が必要であることが，本書や本号の座談会で論じられています．

サステイナビリティ学の具体的な成果がみえるまであと少しです．大学と社会が図2のような密接な関係をもつことで，大学のもつシーズと社会のニーズが対応づけられ，問題が解決されます．大学が努力するとともに，社会もまた問題解決の一翼を担うことが望まれます．持続可能社会を導くヒントがたくさん盛り込まれた本書が広く読まれることを期待します．

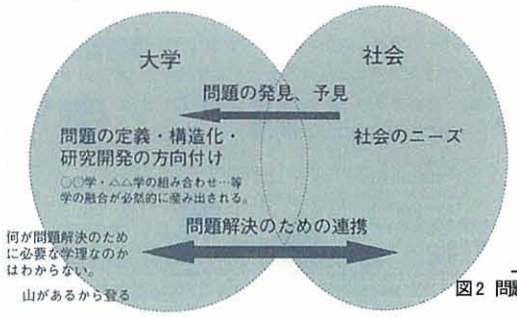



図2　問題解決型研究.（本書223ページより）